第３０回　豊川の明日を考える流域委員会　議事概要

豊川の明日を考える流域委員会事務局

日時：平成20年6月17日（火）15：00~17：10
場所：豊橋市職員会館　5階　会議室

１．開会挨拶（中部地方整備局豊橋河川事務所長）

２．議　　事

１）河川整備計画に基づく河川整備の実施状況について

河川整備計画に基づく河川整備の実施状況について、配布した資料及びそのパワーポイントに基づき事務局から説明した。各委員からのご意見等は次のとおり。

(1)　三河湾で深掘れが発生したのはなぜか。何か目的があって深掘りしたものであれば、そこを埋戻すのは二重投資ではないか。技術的に深掘れが発生しないようにできないか。

・ 蒲郡市大塚沖の深掘れの発生に関しては、恐らくラグーナ蒲郡を建設したものだと聞いている。浚渫で発生した土砂については、埋立地の造成に使用する場合が一般的であるが、深掘れ跡に埋戻すことにより、海域環境の改善にも役立っている。また、こちらの方がコスト的にも安価になる。

(2)　人工的に造成した浅場は長期間維持できるのか。三河湾の広い範囲の自然現象で浅場が減少していることから、維持できないのではないかと懸念する。

・ 過去に行ったシーブルー事業でも同じ懸念があったが、うまく定着している。

(3)　三河湾流域圏再生行動計画に期待をするが、流域圏の全体の話となるため、自治体(県や市町村)の役割も非常に大きい。どのように実施していくのか課題が残っている。また、産・官・学・民の連携による枠組みを早期に立ち上げて、活動基盤を整備することが重要だ。

水質改善などの事業について、具体的な成果を出すことが必要である。

(4)　三河湾の水質悪化は、豊川用水でキレイな水を取り、汚れのある水を戻すために起こる問題である。原因を把握するための仕組みを作ってほ

しい。また、出口である三河湾の調査でなく、流入河川で出水時も含めて調査を行うべきではないか。

・ 三河湾の課題を含めた検討会を設立予定である。
・ 水質悪化の原因の一つは負荷量の増加と考えられ、一つは藻場・浅場の減少であると考えられる。負荷量については、専門家に入ってもらい、共同して出水時の負荷量を把握していく予定である。

(5) 豊川の河川整備が多岐に渡って検討していることは評価するが、河川だけを切りとって議論することは難しく、流域圏での視点が必要である。また、地方分権の流れが進んでいる中で、大臣管理区間だけに限定した議論も望ましくない。国も県や市町村と一体となった議論が必要である。

(6) 三重県熊野の七里美浜や天竜川のように、上流ダム建設の影響で海岸部の侵食が進行するという現象が起きているが、豊川でも設楽ダム建設により同様な現象が考えられるのか。

・ 豊川河口において干潟が消失しているのは、埋立てのため土砂が採取されていた人為的なものが多い。豊川上流域の地盤は岩が多く砂が少ないため、これまで宇連ダム・大島ダムの影響で湾岸部の侵食が発生したわけではないと考える。また、設楽ダムも同様に堅固な地質であり、砂を供給するのはその下流の支川からである。

(7) 豊川流況総合改善事業に関して、費用対効果を算出しているのか。

・ 通常はCVM法という手法が多く用いられているが、今回はコンジョイント分析という手法で行った。その結果B/Cは1.76という結果となり、フォローアップ委員会でも報告し、十分妥当な投資であるとの評価をいただいた。
・ 複数の評価手法で費用対効果を検討し、その結果を比較したうえで評価している。

(8) 奥三河の森林と三河湾を豊川が結んでいるということを考えた場合、上下流の関係が重要になる。災害列島と言われるように、地球温暖化の影響で洪水や水不足などの災害が増えてきているので、災害に対するリスク管理が重要である。

奥三河では限界集落（人口割合で65歳以上が5割以上を占める地域）が増えているため地域の存続が危うい状況になっている。流域圏の一体化や上下流の連携を真剣に考えていくべきだ。

(9)　中国・北陸・東北の地震災害をみると、土砂災害が頻発している。豊川上流も土砂災害に関する対策が必要ではないか。

・ 土砂災害危険箇所は多数分布する。他の流域と同様、特に地震や集中豪雨による土砂災害の危険はある。
・ 豊川上流では愛知県の砂防事業を推進しているところである。

(10)　上流の住民からは「上流の者として水を大切に、きれいに使っているので、下流の人もきれいに水を使ってほしい」と言われる。三河湾浄化では、生活排水でどの程度汚染されているか十分把握されていない。対策方法が思いつかないもの当然だと思われる。

(11)　上流の集落の衰退は森林管理の支障に繋がるので、上下流連携の具体的な仕組みが必要である。

(12)　昨年1月、前豊橋河川事務所長の講演で豊川用水の年間取水量は豊川流量全体の約2割にも及び、日本で一番河川利用度が高いと紹介された。下流地域には上流の恩恵を受けているということを再認識させるべきだ。

(13)　小学校などで子供たちを対象に環境保全の活動を31校で進めている。今の子供たちは人との関わりが少ないため、流域圏一体化に向けては、他の地域のことをいろいろ知ることが大切であると感じている。

(14)　東三河という地域名が一般に通じていることは全国でも珍しい。水源域の人の思いを下流の人が真摯にうけとめることが必要だと感じた。上下流連携については挑戦し続けることが必要である。

洪水問題など100年単位のリスクについて住民の理解を求めていくことが河川整備計画を進めていく上で大切ではないかと考える。

（今後の予定）

・ 本日の議事概要は早急につくり、委員の方にご確認いただき、早い時期にホームページに掲載していきたい。
・ 次回の流域委員会は、来年1月頃を目途に実施する予定である。

３．閉　　会

（了）